

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町

京都大学教育学部図書室

(竹村心気付)

TEL 075-753-3013

大図研大学〔外書購読〕を受講して

西野 真知子

(京都大学教養部図書館)

“外国雑誌論文が読めるようになる”の甘いキャッチコピーに誘われて(?)、大図研大学〔外書購読〕を受講した。講師は京都大学医学部図書館の篠原俊夫氏で期間は1年間、受講生は9名であった。常々語学力の無さを感じ、アルファベットを見ただけで鳥肌がたつ私がこのような自虐的行為に及んだのは、昨年4月念願の図書館員として働くことができるようになり、私なりの図書館員としての自覚からだろうと思う。4月28日からこの3月2日まで計8回の〔外書購読〕、毎回送られてくるテキストの“強制力”と熱心な“仲間”のお陰で、たぶん1人で勉強していたらいつものごとく3日坊主で終わっていたことが1年間も“継続”することができた。

授業はテキストを各自がすでに訳してきていることが大前提(私はしばしばこの掟を破っていた)で、先生の訳を聞きながら難しい表現のところがあれば先生に質問し補助を願い、固有の名称がでてくるとそれはいったい何なのか?日本でいえば何にあたるのか?を解説してもらうといった方法で進められていった。

〔外書購読〕を受講していて良かったなと思う点は、まず①英文に対する恐怖心、アレルギーがなくなったこと。正確にきちっと訳そうと思うと時間はかかるけれど、だいたいの大筋を自分なりに理解する作業は以前ほど苦には思わなくなった多分、書かれている内容が日々の職場のことなので適当に推測し情景を描くことができるからだろう。②論文から外国の図書館事情を知ることができた。例えば、日本では図書館の真の価値がまだまだ社会的に認識されているとは言い難いが、アメリカでは専門職と高く評価されSABBATICALなども認められている(うらやましい限

りだ!!)。しかし、その反面図書館の問題・課題として取り上げられているテーマは、古今東西あまり変わりはないという気もした。③仕事に対する姿勢や考え方の違いを感じた。アメリカは、自分たちの図書館や図書館員の存在意義を強烈に外部にアピールし、自分たちの地位を勝ち取り維持・発展させているように思われる。アメリカのOLは、通勤中はスニーカーを履き一步オフィスに入るとヒールに履き替える。それに対して日本のOLは、通勤にヒールを仕事場ではサンダルを履く例えのような違いを感じた。④京都大学のことしか知らない私にとって、他大学の人たちと交流する場もてた。日常業務に関する情報交換はもちろんのこと、論文の内容についての意見交換――例えばMILKMAN に対する行為に関して図書館員として心構え・行為はどうあるべきか? :MARGARET F. STIEG / TECHNOLOGY AND THE CONCEPT OF REFERENCE OF WHAT WILL HAPPEN TO THE MILKMAN'S COW? (LIBRARY JOURNAL APRIL 15 1990)――ができた。また、⑤タイムリーな情報を得ることができた (Dewey のコロンビア大学図書館学部閉鎖の話や「大学の図書館」1991年2月号のLibrary Journal の記事 [海外大学図書館雑記/過激発言:利用者教育はフリルのようなもの]を見て『もうすでに外書購読でよんだもんね』といった優越感にひたれたり...)。

最終回には各自がそれぞれ論文を見つけてきて自由なかたちで発表することにした。私は3・4回目のテキストに使われた REBECCA R. MARTINの“THE PARADOX OF PUBLIC SERVICE: WHERE DO WE DRAW THE LINE?”の参考文献にあがっていた論文で CHARLES A. BUNGE の“POTENTIAL AND REALITY AT THE REFERENCE DESK : REFLECTIONS ON A “RETURN TO THE FIELD”を選択した。理由はREBECCA の論文に [我々図書館員はすべてのリクエストにイエスと答えるようおしえられている。倫理綱領がそうではないか。しかし実際には資源・能力・時間の欠如から図書館業務の理想と現実のギャップに悩まされ“BURNOUT”になり、チャレンジ・熱意は挫折に変わり、最後は“APATHY”におわる] とかかかれていてそのGap に対する“答え”を知りたかったからだ。結局、時間がなくて発表できなかった。私に残された宿題は、この私が選んだテキストの本文を訳すことと、私が選んだ図書館の仕事の“答え”を見つけることだろう。

先生は最後に『継続することが大切だから、論文のコピーでも手元に置いて仕事にあいま・休憩時間にも気分転換をかねて読もう!!』と激励の弁を発して下さった。そんなことをしたら私の場合、ドドッと疲れて仕事に支障が生じるので遠

慮申し上げようと思うが、時間をみつけて自分なりに継続していきたいと思っている。最後に、この場をかりて1年間大変お世話になりました篠原先生にお礼を述べたいと思います。ありがとうございました

「娯楽センター」その後

京都橘女子大学図書館 小林倫道

本学新図書館開館と共にわがAVセンターがオープンしてから丸5年が経った。

1988年3月発行の本誌(46号)に当AVセンターの前任者による「『娯楽センター』の称号をいただいて」という記事が出てから丸3年になるので、一度その「原点」を振り返ってみて、この間にあったことや日頃考えることをぼつりぼつり文章にしてみたい。お手元に46号をお持ちの方は、一層様子が分かりますのでご参照戴ければ幸いです。

前任者が記事を書いた1988年3月は1987年度の末、(表)で見るとおり利用の絶頂期にあたる。「開設から3年間」の計画で当初採られていたのが「徹底して利用者を引付け、AVセンターの存在を確固たるものにしてしまおう」という「開幕ダッシュ」政策であった。娯楽物もどんどん受入れ、グループ利用できるホールにはクッションを並べて女子大生のフィーリングに訴えた結果、開設2年目にしてあつという間に施設は飽和状態、翌年も利用者総数では横這いで、日常的にもこれ以上の利用者増はスペース拡張でもしない限りありえない、と実感されるころまで来たのであった。

3年目の後半を迎え、予定通り方針の転換を開始する。即ち、利用者定着のための「娯楽路線」(担当者の間では「チャラチャラ路線」と呼んでいるが)から利用の質的向上を目指した「教養路線」への転換である。明らかに娯乐的要素が大である資料の受入を控える、特にロックやニューミュージックのカセットは殆ど入荷されない、といった事態が政策の反映として出現した。その他満員対策として「非娯楽資料」に限って利用できる「学

習専用ブース」を2基、安価なビデオ一体型テレビを購入して増設し、「教養資料」に目を向けさせようとした。

筆者が前任者からAV担当を引継いだのがこの直後であった。以後2年間の利用動向の推移が(表)に見える。方針の転換以後、明らかな減少傾向である。細かく分析すると減った要素に3つあった。第1点はカセット利用者が激減している。つまりロックやニューミュージックのカセットがピタリと入らなくなったこととヘッドフォン・ステレオの普及が原因。第2点は、英語英文学科の利用者の激減。本学では他学科(国文、歴史)に抜きんで流行に敏感というのが同学科の評価であるから、いち早くセンター方針の転換を肌で感じ取ったのか(?)。第3点は、1回生利用者の伸び悩み。以前は1回生の利用が突出していたのがそうでなくなっている。AV機器普及世代が年々台頭してきているのであろう。

分野別の資料回転率を出してみても、いかに「教養資料」の利用度が高まっているかを、「教養路線」の手前、運営委員会でアライバイ的に報告している。いや、たしかに高まってはいるのであるが、まあ雀の泪程の増加であり、水増しの「チャラチャラ」利用が減ったと考えれば、割合的には高まるのが道理である。「学習専用ブース」も導入年度は利用が低迷したことを反省し、教養指定映画をセンターで設定して利用を認めるところ、今では機械がさびつかない程度には動いている。

よりアカデミックに、という方針を立ててやっていくことは大学として悪いことではない。しかし、建前としてやっている「教養」

「娯楽」等というエリアはもう自分の中ではどうでも良くなってきている。特に最近、学生が利用している「ニュー・シネマ・パラダイス」や「いまを生きる」や「オールウェイズ」をちらちら覗いていると、そして学生たちが目を真っ赤にして帰っていくのを見て、ここは本当にいい施設なんだと思う。

今年度はポータブルCDプレーヤーを新たに導入し、出足もまあまあである。ビデオの方も最頂目のせいか何となく昨年より利用者

が多いような気がしている。今年は利用者が増えるかな、と今はちょっと浮き浮きした春の気分を味わっている。

(表) 学生一人当たりAVセンター利用年度推移

| 年度 | 1986 | 1987 | 1988 | 1989 | 1990 |
|-------|------|------|------|------|------|
| 一人当り回 | 5.79 | 7.51 | 6.92 | 5.53 | 4.72 |

第7回支部委員会記録

日時：1991年5月14日(火) 場所：京都大学教育学部

出席：篠原 堤 竹本 竹村 大館 橋本 松原 西野 西川 欠席：小林

1. 報告 (1) 情勢 (2) 大会議案に関する委員長宛意見書について (3) 「年報京都の図書館」について (4) 班会および大学の動きについて (5) 会費納入状況について 2. 議題 (1) 次期継続研修の趣旨とその実行体制について (2) 古書店との懇談会について (3) 支部報について

お知らせ

古書店との懇談会

日時 1991年6月4日 19時-20時
 場所 京都大学教育学部413号室
 テーマ 「京都の古書の流通について」
 お話 竹岡 忠郎(竹岡書店店主、
 京都古書研究会代表)

研究集会のお知らせ

利用のための整理と保存— 目録を中心に

◇とき：1991年6月29日(土) 午後1時30分受付開始

2時~3時 講演

3時~5時 研究発表

5時~7時 懇親会

6月30日(日) 午前9時~12時 研究発表

◇ところ：北海道大学医学部特別会議室(医学部図書館3階)
 札幌市北区北15条7丁目